

資料館だより

第 3 号

昭和59年 7 月20日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館

武蔵村山市中藤6343 TEL 0425(60) 6620



吉祥山遺跡、28号住居址覆土最下層出土深鉢
(加曾利E期：口径57.2cm、器高62.8cm)

特別展「きち じょう やま い せき吉祥山遺跡」

1. はじめに

武蔵村山市内に存在する遺跡は、現在33ヶ所を数え、狭山丘陵南麓の台地上や残堀川、空堀川流域に分布する傾向を示しています。この遺跡の中で、市中央北寄りの狭山丘陵より延びる舌状の台地上に位置する吉祥山遺跡は、その規模や出土遺物の豊富さなどから市民や研究者の間に広く知れわたり、武蔵村山市の代表的な遺跡となっています。

吉祥山遺跡が早くから注目を集めた理由の一つに縄文時代晩期の遺物の出土があげられます。狭山丘陵及びその周辺域の遺跡が、現在214ヶ所を数える中で、縄文時代晩期の遺物を出土する遺跡は5ヶ所ありますが、その中でも規模・出土数とも最大規模の遺跡と言ってよいでしょう。

吉祥山遺跡における発掘調査の歴史は、昭和30年代に始まり、武蔵村山市教育委員会が主体となって実施した最初の発掘調査は昭和52年から3次に渡って行われました。それは墓地拡張工事に伴う事前調査を主体とした調査です。この調査で、先土器時代・縄文時代中期の集落をはじめ、弥生時代・古墳時代・平安時代

2. 吉祥山遺跡の各時代概説

吉祥山遺跡は、昭和52年から昭和58年までの7年間の調査で、先土器時代から平安時代までの住居跡（その他も含めて遺構と呼ぶ）や遺物が検出されている。

(1)先土器時代（写真Ⅰ）

墓地（D地区）より、ナイフ形石器1点、石槍類7点、石刃2点が出土している。出土層は立川ローム層上面で、遺構の検出はない。

(2)縄文時代（口絵、写真Ⅱ～Ⅴ）

a早期：遺物の分布は、ほぼ遺跡全域に広がる。遺構はA地区から土壌1基、D地区から野島式土器が出土した野外の炉（ファイヤーピットと言う）1基が検出されている。土器の主体は、貝殻条痕文系土器であるが、2点ほど沈線文系土器が検出されている。

b前期：遺物の分布は、早期同様、遺跡全域に広がるが、中でもA地区の平坦部に集中する傾向を示す。土器の主体は、諸磯式土器のもので、遺構の検出はない。

にかけての住居跡や遺物が出土し、狭山丘陵の中でも最大級の遺跡であることが明確となって、その重要性が高く評価されています。

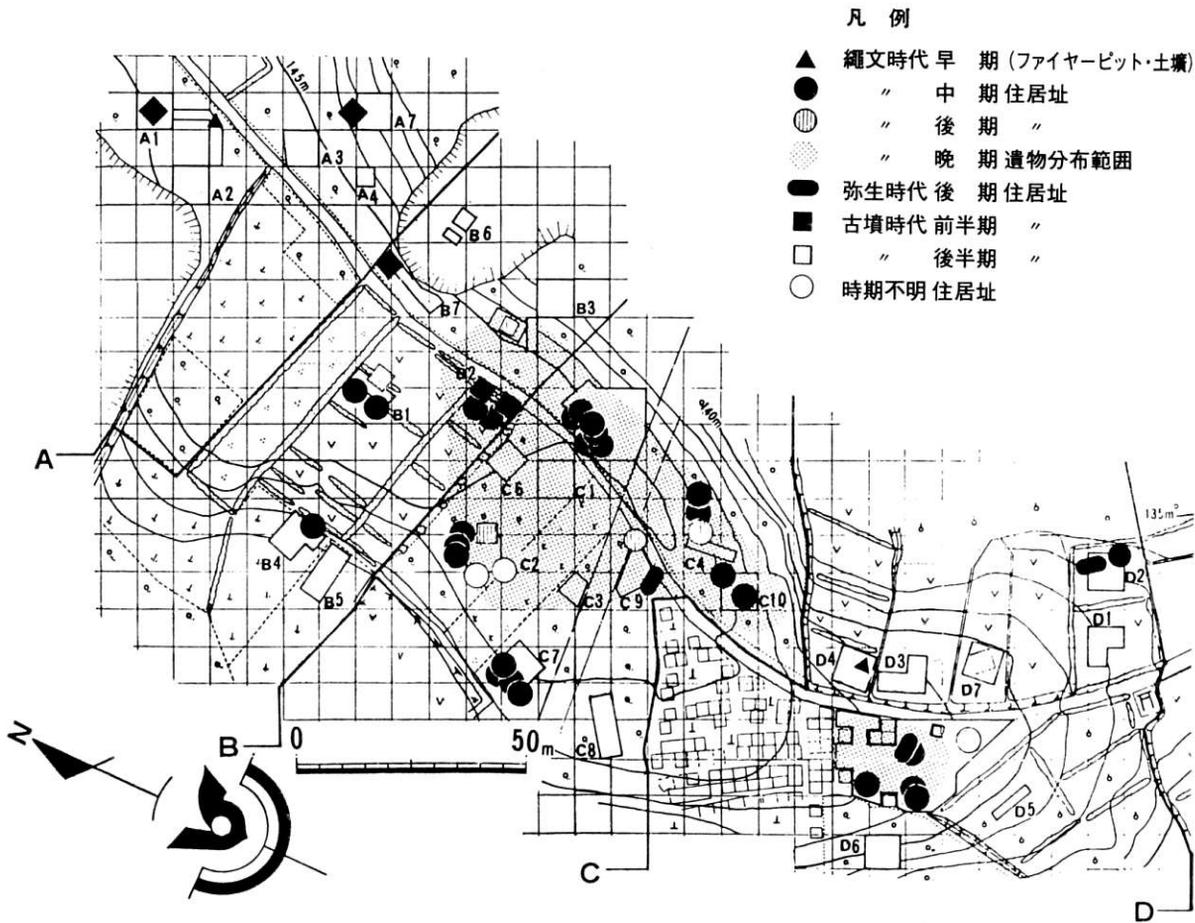
しかし、近年、吉祥山遺跡が市街化区域内に存在することから、開発の波が押し寄せ、放置できない状況が表面化してきました。この貴重な遺跡の保護及び現状保存を目標として、先の調査に引き続き昭和55年から4次にわたる確認調査が実施されました。この調査によって吉祥山遺跡の全体像が把握されるとともに、より一層、その重要性が高まったと言えるでしょう。

以上のように、武蔵村山市教育委員会が主体となって実施してきた7年間に渡る調査が吉祥山遺跡を解明する上で貴重な調査であり、今後の保護・保存対策に大きな役割を果たすことになるでしょう。

特別展「吉祥山遺跡」は、7年間の調査の成果を展示・公開するとともに、吉祥山遺跡の全体像を始めとして、その重要性を広く理解いただくために開催するものです。

c中期：勝坂式土器後半から加曾利E式土器前半にかけての住居址をB～D地区において29軒ほど検出している。その分布状況から推定100軒におよぶ定型形の環状集落を構成することが判明した。集落の規模はおよそ南北方向150m、東西方向50mで吉祥山遺跡における縄文時代の最盛期である。その他、五領ヶ台から阿玉台式土器や加曾利E式土器後半の土器が数十点確認されている

d後期：遺物の分布はB・C地区を中心に、遺跡全体に広がる。称名寺式土器は数点確認されたのみで、堀ノ内式土器の出土数も少ない。出土土器数が増加するのは加曾利B式土器以後で、後期後葉～晩期前半がその中心であり、吉祥山遺跡の縄文時代中期に次ぐ盛行期である。中でも安行Ⅰ・Ⅱ式の土器が最も多く、後期終末の北関東から福島県に分布する土器の出土も確認されている。住居跡は3軒ほど確認



吉祥山遺跡全体図

されており、墓地内の2号住居跡は曾谷式土器^{そや}にともなう住居跡であろう。

e) 晩期^{ばんき}：遺分の分布はB・C地区に集中しており、安行Ⅲ式・大洞B C系の土器を中心に出土している。しかし、晩期後半の土器等は検出されておらず、また現在のところ遺構の検出はない。

(3) 弥生時代^{やい} (写真Ⅵ)

遺構・遺物とも後期弥生町式土器とその時期に相当するもので、中期の遺物は一点も検出できなかった。遺構は住居跡のみ3軒で、遺物とともにその分布はC・D地区に集中している。遺跡の南側にその生活の中心が存在するのであろう。

(4) 古墳時代^{こふん} (写真Ⅶ)

遺構は住居跡のみで、前半期(和泉式)^{いずみ}5軒、後半期(鬼高式)^{おにたか}4軒が確認されている。前半期の住居跡は農道沿い、すなわち台地の尾根沿いに分布し、後半期の住居跡は遺跡全体に分散している。遺物は住居跡内のものがほとんどで、住居跡外出土の遺物は極めて少なく、その少ない遺物もまた住居跡周辺に分布する。

(5) 奈良・平安時代^{なら} (写真Ⅷ)

奈良時代に相当する遺物の検出はなく、平安時代の完全な坏(椀形の器)^{つぎ}が1点出土している他は、布目瓦^{ぬのめ}が中心である。両時代とも遺構の検出はない。

3. 吉祥山遺跡の範囲

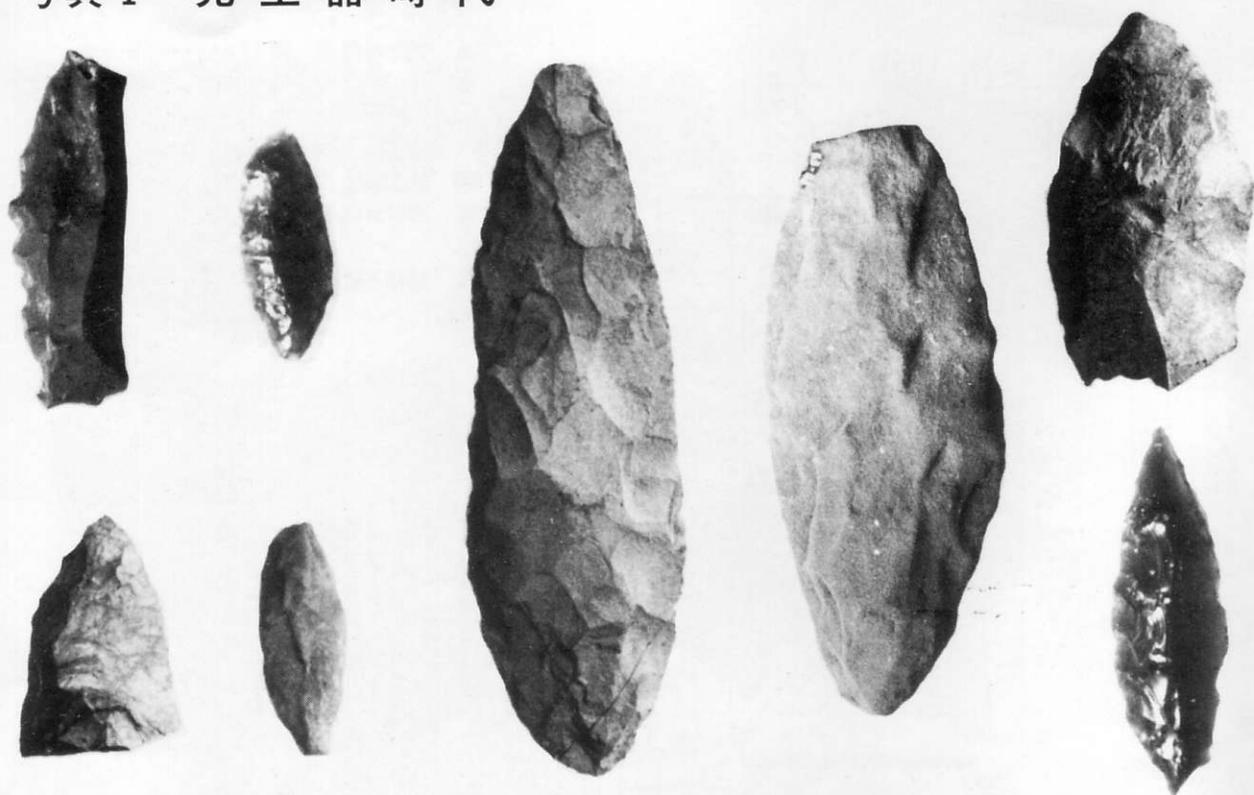
確認された遺構は、A地区中央部からE地区の平坦部まで分布し、台地の傾斜にかかる手前まで構築している。しかし、遺物の分布は遺構の分布範囲を包含し、平坦部はもとより丘陵傾斜部からの出土も多く、特に雑木林内の傾斜部は遺物の廃棄場所の可能性が大きい。

それに加えて、丘陵東側の谷戸には湧水が存在し、西～南側には空堀川が流れる。吉祥山の丘陵上には湧水が見られないことから、これらは吉祥山遺跡に生活した各時代の人々にとって貴重な水源であったと推定できる。

※特別展「吉祥山遺跡」

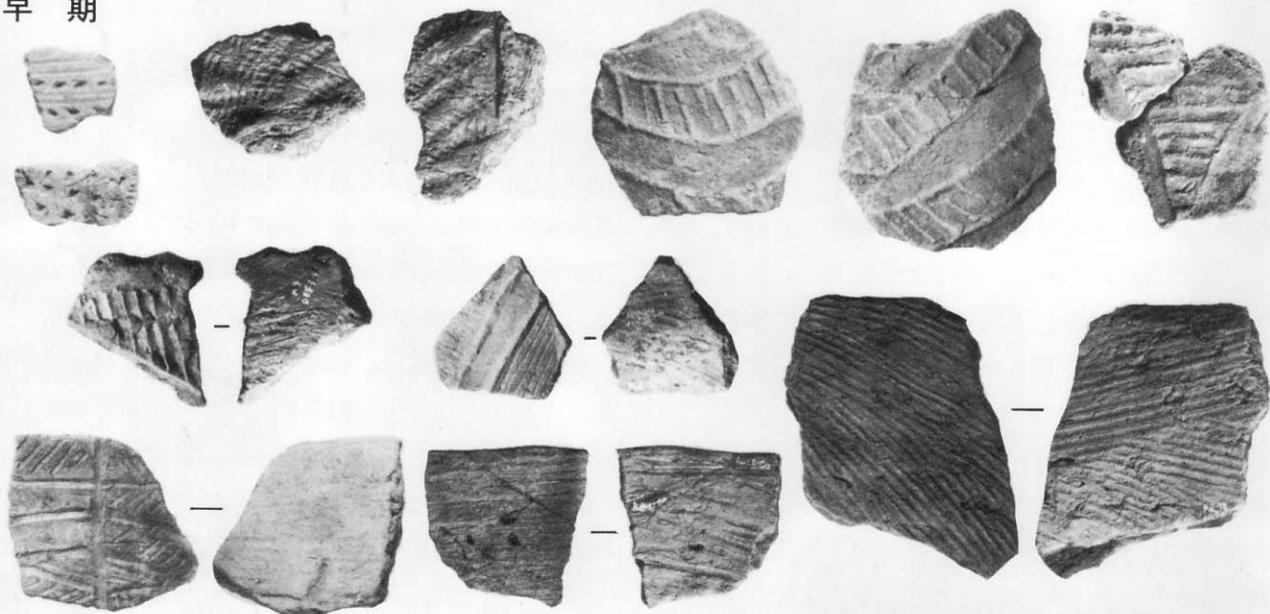
1. 展示期間 昭和59年7月22日(日)～9月22日(土)
2. 展示場所 武蔵村山市立歴史民俗資料館

写真Ⅰ 先土器時代



写真Ⅱ 縄文時代 早・前期

早期



前期



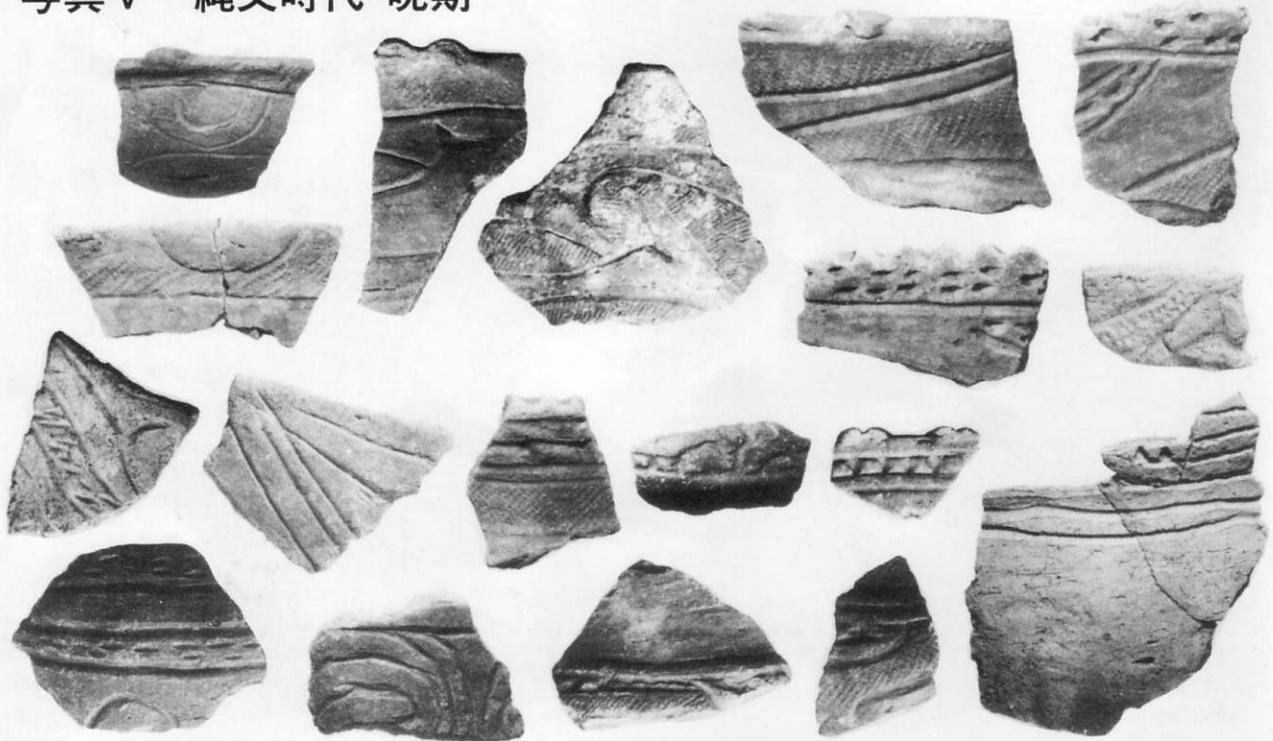
写真Ⅲ 縄文時代 中期



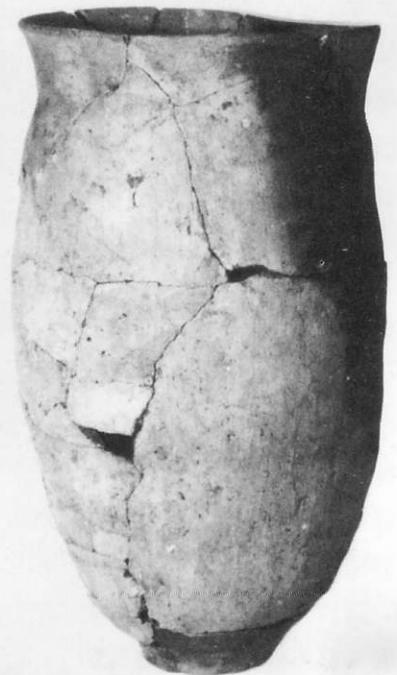
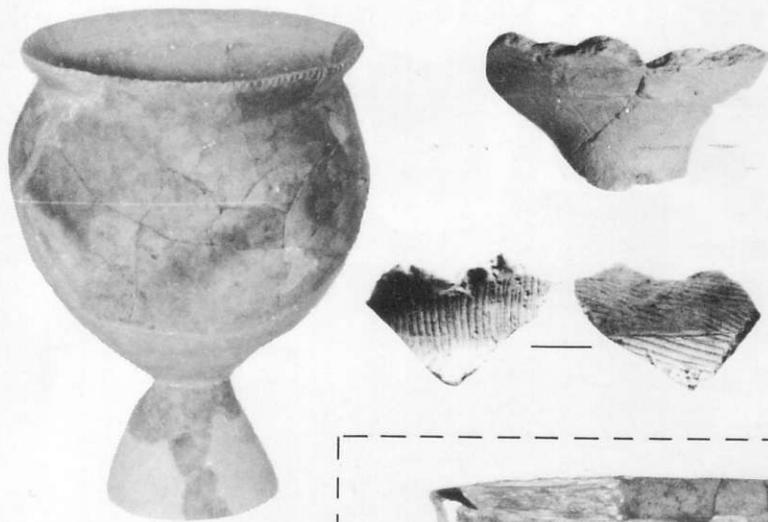
写真Ⅳ 縄文時代 後期



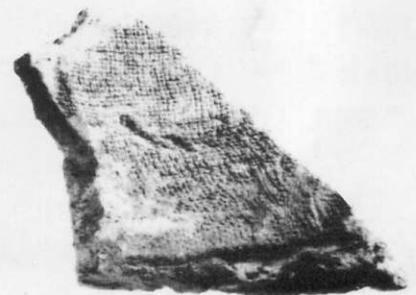
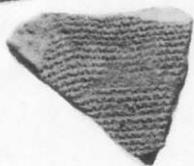
写真Ⅴ 縄文時代 晩期



写真Ⅵ 弥生時代



写真Ⅷ 平安時代



武蔵村山市の庚申塔

現在、市内には21基の庚申塔が確認されております。このうち、館報第2号では4基の庚申塔を紹介しましたが、今回引き続き2基の庚申塔を紹介します。

なお、分布図および、代表的な形状については、前号の館報を参照してください。

岸・須賀神社の庚申塔（写真1 分布図№2）

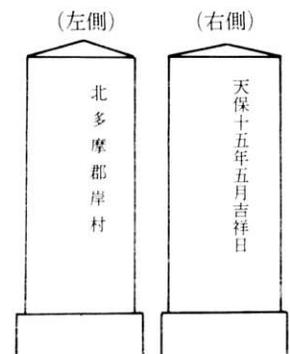
岸の須賀神社の鳥居の前に「庚申」と大きく変った書体で彫りつけた庚申塔が建てられている。高さ145cm、幅・厚さともに40cmの角柱状である。

台石に「講中」と刻み、右側面には「天保十五年五月吉日」と刻んである。左側面には「北多摩郡岸村」と刻まれている。これと同様の書体で、同形の庚申塔が瑞穂町長岡にもある。

杉本林志著「百庚申巡礼記」には「第22番 岸村天王宮仮家四面塔」と記されてある。



写真1 岸・須賀神社の庚申塔



岸・交差点南の庚申塔（写真2 分布図№3）

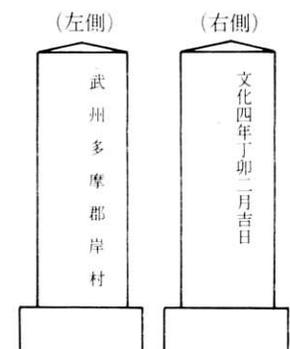
青梅街道の岸の交差点を南に入ると、馬頭観音と庚申塔が並んで建てられてある。庚申塔は高さ180cm、幅40cm、厚さ30cmの角柱状で、正面に「庚申塔」と彫り刻んである。右側面には「文化四年丁卯二月吉日」、左側面には「武州多摩郡岸村」と刻んである。正面上部には日月瑞雲が線刻されている。

杉本林志著「百庚申巡礼記」には「第23番同村青梅海道岸村講中」と記してある。

隣の馬頭観音も文化四年の造塔で、台石左側面に「南 八王子 大山道」と刻んであり、道しるべをも兼ねていたようである。



写真2 岸・交差点南の庚申塔



昭和59年度 資料館事業（実施を含む）

講座・教室

- 歴史講座 7月29日 「武蔵村山の原始時代」
講師 日本考古学協会 橋口尚武氏
- 8月26日 「武蔵村山の古代」
講師 日本考古学協会 今井堯氏
- 古文書講座 11回 (5/29・6/12・6/26・7/10・7/24・8/7・8/21・9/4・9/18・10/2・10/16)
講師 埼玉県史編さん室 根岸茂夫氏
- 子ども自然教室 5回 (6/3・8/5・10/21・12/23・3/3)
- 縄文土器づくり教室 4回 (8/10・8/12・8/25)

展示活動

- 常設展「武蔵村山、その自然・歴史・民俗」 年間
- 特別展「吉祥山遺跡」 7/22～9/22
- 写真展「武蔵村山の今昔」 11/18～12/27
- 作品展「子ども達のつくった縄文土器」 3/3～3/24
- 文化財映画観賞会
- 9/30 「郷土に残る昔の暮らし」 「絵図に偲ぶ江戸の暮らし」
- 11/18 「日本歴史の流れ」 「坂東武者の世界」
- 1/27 「多摩丘陵」 「野鳥の森」
- 3/17 「下町の民家」 「多摩山地の民家」